



# Executive Interview

エグゼクティブ  
インタビュー

no.23

このコーナーは神奈川トヨタのお客様である経営者の方にお話を伺うコーナーです。

株式会社 宇都宮電機製作所 代表取締役

## 木野 泰雄 様

大正13年に操業した宇都宮電機営業所を継承して、昭和11年品川区を拠点として創業した株式会社宇都宮電機製作所。高・低圧ヒューズ専用メーカーとして信頼も厚く、防衛省や大手重電メーカーとの取引も長い。時代のニーズが多様化する中、先端技術に対応し進化を続ける思いなど4代目社長木野泰雄氏にお伺いしました。

### ■ 社会インフラ用から艦船用まで

——ヒューズの開発・製造を営まれているということですが、具体的にどのようなものを作られていますか？

ヒューズというのは、電気を使うあらゆるものに使われています。今の社会インフラに欠かせないものです。例えば、鉄道車両。最近では地下鉄銀座線のリニューアル車両の床下に当社のヒューズが使われています。その他電力設備用電力ヒューズやエレベータ用ヒューズを作っています。

艦船用ヒューズと言って、防衛省の厳しい審査に基づいて合格した認定ヒューズを作っています。大砲や魚雷を撃つ際の振動や衝撃に耐えるか等、防衛省の立ち会いのもと試験された厳しい基準をクリアしたものです。いわゆる艦船やイージス艦等、防衛省の船全てに、当社のヒューズが使われています。直流750ボルトという高圧電力を有して真下に潜る潜水艦用ヒューズも作っています。



その他の多くの一般商船にも使われています。

ヒューズ自体は部品の一つで、単体では一般には売られていません。重電メーカーさんや機器メーカーさんに納め、ヒューズが組みこまれた機器として世に出て、社会インフラ等の役割の一端を担っているということになります。防衛省関連のヒューズを作っていますので、国内での工業用ヒューズでは専門メーカーという事で認識されています。

ちなみに社名は創業者の名前からきています。初代社長の宇都宮頭三がヒューズの重要性に着目して、ガラス管の中に

フィルムを入れて、フィルムのセロファン消弧能力で高容量の電気の遮断方式を考案開発した『セロライトヒューズ』はうちの商標登録になっています。

### ■ 自ら現場に立ち従業員をまとめる

——社長は何代目になられますか？

4代目です。昭和31年に入社して、工場で製造一筋、自分では社長になるなんて思ってもいませんでした。2代目の社長に製造部長になれと言われて55歳で役員になって、平成14年に社長に就任して現在に至っています。製造担当時は時間も関係なく、ただ夢中でやっていました。本当にある意味仕事が趣味でした。

——時には急な発注などで製造部門に無理を言ったりすることもあると思いますが、そういうときに部下の人たちをまとめて引っ張っていくにはどのように



# ヒューズ一筋、時代のニーズに 対応した製品作りで社会貢献を

## していますか？

自分が先頭に立って陣頭指揮をとって、乗り切るといことですね。やはり、現場に自ら入っていけば、だいたい皆ついて来てくれます。現在78歳ですが手が足りないときは、今でも現場に入ります。そういうところで従業員とコミュニケーションをとっています。やはり現場は楽しいです。好きなんです。

## ——社長が入ると現場は引き締まったりするものですか？

いや、逆に和やかになりますね、皆常々緊張感を持ってやっていますので。以前は従業員に鬼だと言われていました。ビシビシやっていたので、現場に入ると「鬼がやってきたぞ」なんて言われていました。そういう印象を与えてしまうと、その印象を変えるのは難しい。そこで私は自分から変わろうと思いました。自分から歩み寄り、下の意見を何でも聞いてやる。そうするとみんなが寄って来てくれるようになりました。

## ■たかがヒューズ、されどヒューズ 専門メーカーとしての責任と 信頼のために

## ——時代の流れによって、今までなかった ようなものにも使われたりすることも あるかと思いますが。

そうですね、上水下水浄水装置用のヒューズや、発電機用のヒューズがそうで、ここ数年のうちに要望され作っています。

ヒューズの使われる部分は様々です。従来のヒューズ感覚ではありえない使われ方をして、我々もびっくりです。新たな要求に対する部分においても、

勉強して吸収していかななくては対応できません。ある程度勉強して知識を付けておく姿勢が必要ですね。そうすれば、要求されることに即座に対応できます。材料などの進歩のスピードは速く、今までのヒューズはこうですから、これをどうぞと言っても使えないわけです。あそこには古いものしかないからでは、お客様は離れてしまいます。ヒューズを専門としている会社として、どんな新しいものでも対応できるという姿勢でおることによって、信頼も得ることが出来ます。

数年前に防衛省の電気班の方が工場を見学に来られましたが、ヒューズの奥深さにびっくりされていました。たかがヒューズですが、されどヒューズ。ヒューズの中には銀の線が入っているんですけど、ただの線ではないんです。それを加工したり、追加したりして、お客様の特性にあった製品を作ります。ヒューズの中に詰まった細かいノウハウに感動されていました。

## ——困難な注文や新しい要望にも応える 原動力はなんでしょう？

話を持ってきてくれた以上はそれに応える。ヒューズ専門メーカーとして、うちがやらなくてどこがやるということですよ。社会貢献の一環です。それも楽しいですよ。

## 株式会社 宇都宮電機製作所

〒140-0002 東京都品川区東品川3丁目5番1号

TEL: 03 (3471) 2791

FAX: 03 (3471) 2795

URL: <http://www.utsunomiya-el.co.jp>

藤沢工場 〒251-0861 神奈川県藤沢市大庭8358

新潟工場 〒959-4304

新潟県東蒲原郡阿賀町豊実乙1440

## ——困難を乗り越えた時の達成感ですか？

そうですね、やっている人間は大変ですけどね。

## ■時代とユーザーの要求に 対応して社会貢献を

## ——今後の目標を教えてください。

時代の流れが速いので、それに対応しなければいけないということですね。機器もどんどん新しくなっていく。進化について行かなくてははいけない。我々も昔のままでは対応できなくなってしまいますから。自分本位に開発しても、ユーザーがいないよと言えそれまでですから、ユーザーの要求に沿って供給していく、常に新しいものに対応していくことです。

その一方で、ヒューズは10年15年使われるものです。日本電機工業会の方でも、定期的な交換を推奨していますが、実際は20年以上使われていて、40年後に交換したいと言われれば、供給しなければいけない。そういった供給責任もあります。1本のヒューズが、動かなければ、1千万円の製造ラインが動かなくなるということもあります。そういうことがないように、30年40年前のものでも同じものが作れる体制も保ち続けています。

会社自体100年以上続けるために、いいものを作って、社会貢献していくということが大切です。時代に対応できるような体制を整えるということですね。

## <インタビューを終えて>

ユーザーの要望に応えるため、未知の分野も積極的に研究し備える。“うちがやらなきゃどこがやる”という言葉に、ヒューズ一筋の専門メーカーとしての責任とプライドを感じました。